

# 大名転封時における領主と領民

——越前国鯖江藩間部氏の転封を素材にして——

東 谷 智

## はじめに

大名が転封する際、領主と領民の関係はどのように変化するのだろうか<sup>①</sup>。従来の研究では、領民が領主を引き留めるため訴願を行うなど、領主と領民の関係が継続することを望む事例が取り上げられることが多かった<sup>②</sup>。例えば、唐津藩を素材として転封による領民への影響を検討した宮崎克則氏の研究や天保十一年（一八四〇）の三方領地替えへの転封反対一揆を扱った北島正元氏の研究などがある<sup>③④</sup>。

しかし近年、領主と領民の関係について、その捉え方が大きく変化している。一九八〇年代が一つのターニングポイントだったと言えよう。支配・被支配関係の中で理解されてき

た領主と百姓の関係を負担と御救という関係で理解しようとした深谷克己氏の研究や、領主と百姓の関係を「一種の公的な平和契約」と捉える朝尾直弘氏の研究がその画期となろう<sup>⑤⑥</sup>。こうした動向を藪田貫氏は、両者の関係を支配・被支配という一方的な関係だけで捉えるのではなく、双務的、相互契約的な関係として見直すという新たな近世史像と評価している<sup>⑦</sup>。

領主と百姓を双務的、相互契約関係とみる場合、領主が交替する局面において負担と御救という関係はどのように変化したのだろうか。また、「契約」関係はどう変化したのだろうか。転封により領主と領民の関係は旧領主と旧領民との関係に移行する。本稿では、前者から後者への移行過程を検討する。具体的には、百姓成立の根幹をなす御救としての貸し付

けの処理について検討を加え、転封時における領主・領民間の関係性の変化を明らかにしたい。その課題に応えるため、享保二年（一七一七）に上野国高崎と越後国村上との間で実施された間部氏と松平氏の交換転封を素材とし、間部氏の事例を中心に分析を加えていきたい。

間部氏が大名となったのは詮房が当主である宝永三年（一七〇六）一月九日のことであり、七千石の加増により計一万石を領することとなった。同年二月一日には詮房が側用人に就任したと考えられ、老中の次席に候することとなった。以後、宝永四年には一万石が加増され（計二万石）、宝永六年にも一万石が加増（計三万石）、宝永七年には二万石の加増の上（計五万石）、上野国高崎城主となる。<sup>⑩</sup> それにともない、松平輝貞が高崎から越後国村上に転封になる。

詮房は側用人として六代將軍家宣のもとで新井白石と共に中央の幕政に参与したが、七代將軍家継の死後、享保二年（一七一七）越後国村上に転封となった。<sup>⑪</sup> 同時に越後国村上の松平輝貞が上野国高崎に転封となる、いわゆる交換転封であった。間部詮房は、享保二年二月一日に転封を命じられ、

同年五月一日に高崎城を松平氏に引き渡し、同年六月三日に松平氏から村上城を受け取り、領地替えの手續きを終え

た。<sup>⑫</sup>

間部詮房の死後の享保五年、詮房の養嗣子詮言は詮房の遺領を継ぎ村上から越前国鯖江へ転封となり、越前国で五万石を領有した。<sup>⑬</sup> 領地に多少の変化はあるものの、幕末まで鯖江に定着した。鯖江への転封は、享保五年九月一二日に命じられ、享保六年三月二六日に幕府代官小泉市太夫・窪島作右衛門から鯖江を受け取り、同年四月二一日には村上を内藤氏へ引き渡して領地替えの手續きが終わった。<sup>⑭</sup> 鯖江は、間部氏入部以前は幕府代官の陣屋があるのみで、陣屋町の形成が困難なほどの狭小な土地だった。陣屋町形成の土地確保のために、享保六年（一七二一）九月九日に西鯖江村とは地続きの東鯖江村を小浜藩から村替によつて鯖江藩領とし、同年一月一日に手續きを終え、陣屋町の形成が可能となった。<sup>⑮</sup>

このように間部氏は上野国高崎→越後国村上（享保二年）、越後国村上→越前国鯖江（享保五年）と短期間に二度の転封を経験した。本稿では間部氏の享保二年の転封を中心的な素材とし、転封時の年貢未進処理について検討を行う。

## 第一章 未進年貢の処理

### ―平時と転封時の比較から―

#### 第一節 転封時における未進年貢の取り立て

転封時に未進年貢はどのように処理されたのだろうか。享保二年（一七一七）四月一五日に上大類村などの百姓が江戸屋敷へ訴え出た際の史料をみてみたい。<sup>16</sup>

#### 【史料1】

(A)

一、上大類村百姓十式人・高関村百姓八人・下新保村百姓三人・上日高村百姓四人・猪野村百姓并組頭一人、一昨十五日此方御屋鋪江参訴候付、真知田理左衛門・愛屋平藏・山村儀右衛門様子相尋候処、

(B)

①御年貢未進米此節厳敷御催促被成候、兼而困窮之百姓共二而上納滞候、麦作茂近々出来候間、代替候迄御取延被下候様二願上候処、御聞届無御座候、

大名転封時における領主と領民

②実々未進之百姓者此度村上迄可被召連之旨被仰付候、  
③左候而者弥未進上納可仕様無之候、尤田畑茂荒申より外無御座候間、麦・蚕出来迄御取延被下候様二と達而願候キ、

(江戸)

④於高崎支配之御役人差越御当地迄罷出候段不届二候、此方御領知二罷成前々ノ御領主様御取箇ヲ大分御引下御救被遊候御慈悲をも不顧、不謂願二遠方罷出候難用之失墜忘重疊不届千万二候、尤御所替ニ無之候ハ、御救之筋も可有之哉二候へとも、御引渡前も近寄候へハ不能了簡候、早々在所江罷帰、出来麦・絹・綿等之心当名主・百姓仲ケ間申合を以、金子他借何分ニ茂可相成儀候間、御領知之内御救之御厚恩を存し上納候様申渡候、若此上支配之御役人申付をも不相用候ハ、急度被仰付様も有之段彼是右兩人申合相返し候、

(C)

①先頃出府之節も上大類・高関両村者別而困窮之由物語二而候へとも、其筋二品を付候而ハ弥御領中一同之訴訟ニ可罷成候、無申迄候へ共幾重ニ茂御用人・御勘定奉行被遂相談、実々未進之分ハ種貸等之積返納無相違様二証文入念取候様可被申付候、

②上大類米百四拾二俵・高関七十二俵・下新保六十五俵  
未進之由申候、何茂大分之滞きのとくニ存候、

③且又猪野村者組頭も忝人願罷越候、別而不届候間、組  
頭義ハ其元ニ而吟味之上被申付様も可有之哉可被致了  
簡候

この条文は、(A)上大類村の百姓らが江戸屋敷へ訴え出たことに対し、江戸屋敷の目付である真知田理左衛門ら三名が対応したことを江戸から国元へ知らせる部分、(B)百姓と目付のやりとり、(C)今後の対応について江戸家老から国元家老への指示、から構成されている。百姓らの要求は、間部氏が松平

氏と交替するまで未進年貢の納入を延期することであったが、詮房は許可しなかった(B)①。百姓は再度の納入延期を願ひ出るものの(B)③、目付二名が以下の四点を申し含めて百姓を高崎へ帰した。一点目は松平時代よりも年貢を引き下げるといふ御救を行ったにもかかわらず、遠方まで来たことが不届きであること、二点目は所替がなければ御救があるだろうが、高崎の領地を引き渡す時期が近づいているので無理であること、三点目は早々に在所へ帰り金子を借用してでも未進年貢を上納すること、四点目はこの上役人の申し付けを

用いないことがあったら処罰すること(B)④。

百姓と目付の応答で注目したいのは、百姓が未進年貢納入の延期を求めたことに対し、間部氏が延期を御救と認識している点と、領主の交替が近いため御救が行えないと発言している点である。これは、負担と御救によって百姓成立が実現していることが確認できるとともに、転封時に領主・領民関係が断ち切れ、負担と御救の関係も切れることを意味している。すなわち領主と領民の関係は、領主への負担で完結し、御救という新たな関係が再度構築される―再び双務の関係が結ばれる―という構造であったことを示している。

こうした構造のもと、江戸家老は負担の完結に向けた指示を出す。上大類村・高関村は享保元年にも困窮である旨を訴えていたが、「其筋二品を付候而ハ弥御領中一同之訴訟ニ可罷成候」と、両村の訴えを取り入れたとしたら藩領を挙げた訴えになる可能性を指摘し、「種貸等之積返納無相違様二証文入念取候様」と未進分を御救ではなく「貸借」関係として負担の完結を目指す方針が示されている(C)①。具体的な未進高が示され、気の毒との感想が記されているものの(C)②、負担と御救の関係から脱却し、「貸借」関係へ移行することを目指し、個々の百姓に厳罰をもって対するように指示

が出されている(㉓)。転封時における関係性の変化について、以下の記述では「未進年貢の「貸借」関係化」と記している。

未進年貢の処理については、幕府から転封が言い渡された享保二年二月一日の御用状で国元へ基本方針が伝えられている。<sup>(18)</sup>二月一日の御用状は、越後国村上への転封を国元に知らせる速報であり、通常の御用状に比較すると情報量がかなり絞られたもので、分量が格段に少ない。転封の通知のみであるが、「未進其外拝借等稠敷取立可被申付候、殊之外取込候故早々申入候、委細者跡分追々可申達候」と未進年貢の取り立てに関する一文が加えられている。転封に間部氏が直面した時、未進年貢の取り立てが最重要事項と考えられていたと言えよう。

その背景には、宝永七年に松平氏が越後国村上へ転封になった時の先例を間部氏が意識していたことがある。二月一七日には次のような指示が出されている。<sup>(19)</sup>

## 【史料2】

一、未進米之儀随分セリ立、御引渡前二皆済候様二稠敷取立可被申候、<sup>(1)</sup>先年右京大夫様未進不埒仕儀二候間、尚

大名転封時における領主と領民

以御引渡以後者納め申間敷と察候、就御所替用捨難成段被申渡、未進之百姓手錠又者品二より牢舎二茂被申付、無油断急度取立候様御代官へ可被申渡候

宝永七年に松平輝貞が転封した際、年貢未進の処理が解決しなかったことに触れ、領地引き渡し後に未進分を納めさせることが難しいとの見通しを述べている(傍線①)。その上で、転封を理由として未進分を帳消しにすることはない旨を百姓へ申し渡し、手錠や牢舎を仰せ付けるとの強い態度で取り立てに臨むよう代官に申し渡すことを国元家老へ江戸家老が指示している(傍線②)。しかし二月の時点では未進年貢を「賃貸」関係化する指向はまだみられず、取り立ての強化について述べるのみである。

手錠や牢舎を見据えて未進年貢の取り立てを強化することは、転封時に特有の対応だったのだろうか。次節で検討したい。

## 第二節 平時における未進年貢の処理

史料3は、転封前年の享保元年に未進年貢をめぐる領主

と領民の間で駆け引きが行われた経緯について、江戸家老が国元家老に宛てて書いたものである。<sup>(20)</sup>

### 【史料3】

一、御年貢未進方取立指支候儀、極老之親・兄弟又者厄介多百姓無<sup>(21)</sup>抛<sup>(22)</sup>二而相滞候分、麦・蚕・絹出来迄指延之、且田地売<sup>(23)</sup>をくれ、買手無之分田地指上申度与申出候族者、百姓願次第田地取放、尤田地指上候上者、所二居住いたさせかたく候間、追放之積稠敷く被申付置候、此上如何可申出哉難斗旨、是等之分人数も多ク、牢舎・手錠申付候而茂当分埒明不申候間、是又蚕・絹出来之上取立可然御用人中被存之由伺書之紙面令承知候

百姓の中には未進年貢の納入延期を申し出る者（傍線①）や、耕作地の放棄を申し出る者がいた（傍線②）。これに対し、国元家老は、百姓が耕作地を放棄したら所払いにすると厳しく申し渡している（傍線③）。しかし、国元家老は、「此上如何可申出哉難斗」と百姓側の対応について予測が立たない状況を江戸家老に伝え、牢舎・手錠を申し付けても解決せ

ず、蚕・絹が出来てから未進年貢を取り立てるのが現実的な落とし所だと用人が考えていることを江戸へ伝えている。<sup>(22)</sup>この報告に対する江戸家老の指示は以下の通りであった。<sup>(23)</sup>

### 【史料4】

(A) 相続難成百姓者田地を上ケ立退、或奉行・代官江田地・家財受取御年貢方埒明候儀者、何方ニ茂有之儀候へ共、国・所之風儀ニて様子茂替儀可有之事候、左候へ者ケ様之筋与申儀決定難申遣候、

(B) 左候とて相滞百姓ハ麦・蚕・絹出来迄差延ルと有之候而ハ、猶々未進方未熟・難渋之気味ニ茂可相成哉与存候

(A)より、未進年貢の処理として耕作地を返上して在所を追放する方法や、（領主の）奉行や代官が田地と家財を受け取ることによって年貢未進を解決する方法があることを江戸家老は知っていることが伺える。しかし、江戸家老の判断は、場所ごとに様子が異なることから、確たる方針（「ケ様之筋」）

を決定して国元に指示できないと述べている。未進年貢の処理は、国元で百姓に相対する役人でなければ判断を下すことができず、逆に年貢収納の現場を熟知していない江戸家老には判断できないことを示す江戸家老の言葉である。そのため、江戸家老は国元家老に以下の指示を与えた（「御用状」享保元年閏二月一四日）。

### 【史料5】

（江戸家老）

一、此度御用人中伺之紙面、此方之了簡を受、其上二而如何様共可被申付趣二候へ共、右申候通、所之風儀ニより勘弁可有之儀ニ候間、御用人中存知寄之意味相、今一往伺書被指出候様被申渡可然存候、其上二而被致了簡又々此方江茂被及相談候様にと存事候

傍線部では、未進年貢に対する最終的な処理について決定するのが江戸家老であることを示しつつ（「此方了簡を受」）、「所之風儀ニより勘弁」と年貢収納現場における判断を重視する立場からさらなる「伺書」の提出を用人に命じている。<sup>24</sup>

以上の検討から、平時における未進年貢の処理は、最終的な決定権は江戸家老にあるものの、年貢収納の責任者である

代官の判断が重要な根拠となった。つまり、ボトムアップ型で未進年貢の処理がなされたとの評価ができる。これは転封時における未進年貢の処理とは大きく異なる。転封時に江戸家老が国元家老に宛てた御用状では、「御聞届無御座候」（史料1(B)①）と未進年貢の処理について藩主の決済を受けたことや、「実々未進之百姓者此度村上迄可被召連之旨被仰付候」（史料1(B)②）と藩主から未進年貢の具体的な解消策を指示されて江戸家老が処理に当たっていることが記されている。最終的な決裁権が藩主にあり、藩主から江戸家老、目付、百姓というルートで未進年貢の処理についての決定が伝えられている。つまり、トップダウン型で未進年貢の処理がなされたのである。

平時の未進年貢の処理においては、領主・領民とも表面的には強硬な主張をするものの、最終的には御救によつて処理をするという負担と御救の関係がすでに成り立っていた。そのため通常は江戸家老の権限において、ボトムアップ型で御救を具体化するという処理が可能であった。しかし、転封時の未進年貢は、手錠・牢舎を領主側が主張しつつ強行に年貢収納を求めるといふ平時の処理プロセスを経ながらも、転封という特別な状況下で御救を具体化するのではなく、負担に



よる完結を目指していた。こうした矛盾を内包していたため、通常の江戸家老の権限では処理しきれず、藩主の決済によるトップダウン型の処理を行ったのであった。では未進年貢はどう処理されたのだろうか。次章で検討したい。

## 第二章 未進年貢の「貸借」関係化

### 第一節 貸付金による「貸借」関係化

第一章で、享保二年（一七一七）の転封時の未進処理について検討し、未進分の取り立て強化という基本方針のみが示されている段階（二月）から、藩主のトップダウンによる未進年貢の「貸借」関係化が行われている段階（四月）へと変化したことを述べた。また、「貸借」関係化の具体的な処理としては、未進年貢を種借の形をとって貸付金として処理することと（史料1(C)①）、未進の百姓を村上まで連れて行くこととがあった（史料1(B)②）。本章ではこの二点の処理方法について検討したい。

次の史料は、未進年貢の貸付金取り立てについて、国元家老が江戸家老へ宛てた対応の報告である。<sup>25)</sup>

#### 【史料6】

一、高崎旧領村々江御貸附物返納不埒付、新井所左衛門・村松惣兵衛兩人之内高崎江被指越取立可然旨御用人中被申候故、当月初分盆前迄彼地逗留之積可被差越之旨、右京大夫様も村上御旧領村々江貸附物為取立郡奉行老人被遣、村上町ニ滞留之由令承知候

高崎の旧領村々への貸付金返納が解決しないため、代官の新井もしくは村松を取り立てのため高崎へ派遣すべきだとの用人の意見を受け入れ、高崎に盆前まで派遣する予定だと報告されている。<sup>26)</sup> 貸付金の滞納に対し直接徴収をせざるを得ない状況であり、転封後の貸付金回収が困難であったことを示している。

史料7は享保六年、鯖江に転封後の御用状であるが、貸付金の取り立てが全く好転しない状況を示している。<sup>27)</sup>

#### 【史料7】

一、御旧知高崎領村々七年賦御貸金為取立、山内彦大夫被差越候処、精出可納旨申二付長々致逗留候得共、納兼纔乾金三拾四両余取立先月十七日帰着申候、彦大夫并



足輕兩人相添被指越候、道中往来入用高崎逗留雜用二も足り不申旨氣之毒存候、彦大夫指出候口上書被差越、致一覽候

鯖江から高崎へ貸付金の取り立てに山内彦大夫が派遣されたが、諸経費にも満たない回収金額であった。「精出可納」と借用主は言うものの、納入することなくやり過ごしていくことが可能であった。先にみた史料6の事例と併せ考えると、未進年貢を貸付金として「貸借」関係化したとしても、「貸借」という相對關係である以上、強制力をともなう回収を旧領主が行えなかったことを示している。旧領民からの返済が実現されず次第に不良債権化していく様子が窺える。間部氏の江戸家老が「氣之毒存候」と腹立たしさを率直に記しているが、間部氏は旧領民に対してなすすべがなかったのである。

では旧領民からの返済を実現するにはどのような手立てがあったのだろうか。次の史料は、間部氏が高崎時代に飛地領として所領を持っていた伊豆国の事例である。伊豆の飛地領は間部氏の転封にともなって幕府領となった。取り立てておいた享保元年の物成を大名主が上納せずに欠落ちしたという

やや特殊な場合ではあるが、旧領地からの未進年貢収納を実現させる手立ての例である。<sup>28)</sup>

## 【史料8】

(A)

一、豆州御旧領田方郡加殿村大名主弥兵衛、去ル申之御年貢村々々取立置候御米之内四百式拾四俵、金九百六拾四両式分余上納不仕酉ノ三月致欠落候、右之内段々取立残り米四百式拾四俵・金四百九両二分余之儀、弥兵衛一類共々弁納候様江川太郎左衛門様へ被仰付候へ共、米金高ニ付一類共弁納仕兼候段太郎左衛門様江戸御留守居荒井五郎兵衛方々粗断有之候、兎角急ニ御取立難被成候間、年賦ニ成共御取立可然哉之旨、真知田理左衛門迄右五郎兵衛を以太郎左衛門様御内意御座候、尤此方より取立申儀難仕御座候故、任其意当戌ノ暮々乾金三拾両之積新金ニ而拾五両宛毎年無遅滞弁納之筈、弥兵衛親俸并一家之もの、加殿村名主・組頭・長百姓連印証文ニ、太郎左衛門様彼地支配之手代安井平次兵衛・三田縫殿右衛門・安井弥一右衛門奥書印形取之候、則此度右証文差上申候、被入御覽重而御返可

## 被成候

享保二年三月に欠落して以後、享保三年一二月までに約四七〇両を間部氏が弥兵衛一類から取り立てている。弥兵衛一類は代官江川太郎左衛門から残りの年貢未進分を間部氏へ納めることを命じられているが（傍線①）、注意したいのは、取り立てが不可能になった後に新領主である幕府の代官が関係している点である。すなわち、旧領主、旧領民間の「貸借」について、相対での返済が不可能になった場合、新領主の協力を得て取り立てたのである。この場合は江川太郎左衛門の「内意」が太郎左衛門の江戸留守居から間部氏の江戸留守居を通して伝えられている（傍線②）。旧領主の取り立てによって旧領民が成り立たなくなることは忌避しなければならず、新領主が百姓が成り立つ範囲内での返済方法を「内意」として提案したのである。さらに新領主が取り立てを請け負うことで返済を実現することを証文によって保証したのであった（傍線③）。

つまり、旧領主から新領主への依頼によって、新領主が取り立てを代行し、新領主の百姓成立が可能な範囲で不良債権化した「貸借」関係を解消する手立てとしたのである。

## 第二節 武家奉公による「貸借」関係化

一方、未進の百姓を高崎から連れて行くことによる未進年貢の「貸借」関係化はどのような処理が行われたのであろうか。史料9はその事例である。<sup>②</sup>

## 【史料9】

## (A)

一、去夏高崎召連候足輕・中間、段々致欠落居残候もの少々有之候、一分之未進ニ無之人代ニ参候、小遣金も不相渡候故着類等可仕様も無之二付、永ク相勤り申間敷候、

## (B)

殊ニ未進之代りニ永ク留置候儀、右京大夫様江御遠慮も可有之哉、就夫鈴木清蔵心附之書付差出候、

## (C)

此度被指越遂一覽候、未進之代り相済候迄永ク指置候とも、対右京大夫様少茂御遠慮と申筋ハ無之候へ共、其元ニ残居候もの共ハ或病人或年寄又者若輩にて御用

二不相立趣二候へ者、無全御扶持費候間、高崎江指戻候様可被申渡候、村上合未進之代り二高崎参候百姓者、当春未進切レ罷帰筈之由令承知候

(A)(B)より、高崎から召し連れてきた百姓が武家奉公人として足輕・中間となつてゐることが判明する。つまり、武家奉公人として受け取るべき給金で未進年貢に相当する金額を支払うという処置をとつたのである。これは、労働力の提供によつて未進年貢を納入することであり、未進分を貸付金として「貸借」関係化をはかつたと言えよう。また武家奉公人として返済することについては、返済手段の提供という側面と、担保としての身柄確保という側面があつたと考えられる。間部氏と同様、松平氏も武家奉公人として未進分を返済する処理を行つており、転封時の未進年貢の処理方法として一般的であつた。<sup>30)</sup>

しかし、実際に武家奉公人となつた者は、年貢を未進してゐる百姓の代わりの者であつた。着類にも困るほどの困窮人であつたことが伺われ(A)、病人、年寄、若輩などで役に立たない者が大部分であつたと考えられる(C)。江戸家老は、無駄な出費と考え、高崎へ戻すように国元へ指示を出してゐる。

働きぶりの悪さに加え、旧領主のもとから欠落をする者もみられた。史料10は、欠落についての処置を江戸家老が国元家老へ指示した史料である。<sup>31)</sup>

#### 【史料10】

(A) 一、其元御領内村々合右京大夫様江指出し候出人追々致欠落候、三条之大庄屋江被致其届候間、彼地二被相詰候右京大夫様御役人合此方御役人江被申通筈二候、

(B) 尤高崎合村上江被召連候足輕・中間欠落、高崎御領江帰り候者共吟味致置候間、被仰聞次第可申付旨右京大夫様御留守居中合此方御留守居江被申聞候へ共、其元御領内之者大勢立帰、高崎者欠落すくなく候へ者、其届いたし候茂いか、と先見合、給金取立之儀頼不申候、

(C) 其元合欠落足輕・中間於高崎被改置由二候間、其元に而も高崎合立帰り候者致吟味置候様可被申付候、給金取立之儀ハ考之上二而双方申合候様可被致候

史料10の(A)では、松平氏が村上から高崎へ連れて行った百姓が欠落をし、村上領へ立ち戻っていることについて、(B)では高崎から村上へ召し連れてきた武家奉公人について記述されている。注目したいのは、欠落に対する松平氏と間部氏の対応の違いである。松平氏から蒲原郡三条町の大庄屋へ届けが出されているのに対し(傍線①)、間部氏は届けを見合わせ、給金の取り立てを頼んでいない(傍線②)。このことから、届けとは具体的には、欠落して国元へ戻った者から給金——本来未進年貢に充てるべき金——を新領主が取り立てることを旧領主が依頼することである。ただし、この時点では給金の取り立てを認めるかどうかの判断を保留している。

史料11は享保二年八月九日に江戸家老が国元家老へ宛てた指示である。<sup>③</sup>

## 【史料11】

一、先達而申遣候松平右京大夫様高崎江被召連候四万石領出人欠落之義、あなた郡奉行中①(高崎)此方御役人中迄頼可被申越之由二而、又々如此白井儀大夫方迄御留守居より被申越候、為心得返答之写共二遣申候、御双方御役

人頼合之積二候ハ、其段可被申越候、高崎もの欠落給金取立之儀頼候様ニ可致候

松平氏の留守居から間部氏の江戸留守居白井儀大夫へ再度依頼があったことが記されており、その依頼は高崎の郡奉行から村上の役人に宛てたものである(傍線①)。また、先に判断を保留していた給金の取り立てを認める旨を江戸家老から国元家老へ伝えている(傍線②)。

以上の検討より、欠落の処理について整理しておきたい。(a)旧領主が新領地へ連れて行った旧領地の百姓が欠落した場合、旧領主は旧領地の新領主へ欠落した百姓の給金の取り立てを依頼する。(b)双方の留守居が窓口となって依頼が行われた。(c)依頼を受けた新領主は欠落した百姓の居所へ欠落の事実と給金取り立ての依頼があったことを通達する。(d)新領主が認めた場合、新領主は旧領主に代わって取り立てを行う。

小括

未進年貢の「貸借」化について、貸付金として処理した事例と、武家奉公人として処理した事例を検討した。いずれも年貢という領主・領民間の関係から「貸借」関係へと移行し

ている。しかし、「貸借」関係であるがゆえに、強制力をともなっていないかった。そのため不良債権化した「貸借」関係の解消には、強制力をともなう新領主による取り立てが不可欠であり、旧領主から新領主への依頼によって成り立つ処理方法であった。次章では「貸借」関係化が成り立つ背景と、「貸借」関係解消のメカニズムについて検討する。

### 第三章 「貸借」関係化の成り立ちと実現

前章までで検討した「貸借」関係はなぜ成り立つのだろうか。その背景について、他藩の事例も加えて検討したい。

転封時には幕府から上使が派遣され、上使を介して新旧領主間で城が引き渡される。その際、城下に上使名で高札が立てられる。<sup>33</sup>この高札は、老中が上使に宛てた下知状の文言を記したものであり、その中には未進年貢の処理についての規定がある。寛永一〇年（一六三三）に松平忠重が上総国佐貫から駿河国田中へ転封になった時の老中下知状をみてみた。<sup>35</sup>

#### 【史料12】

條々

一、今度所替二付て、百石二壺疋壺人出之、二日路可相送事

一、種借之儀、自蔵出之、借付儀於無疑は、可返弁事

一、借物は可為証文事

一、年貢未進可棄捐

一、未進方に取つかふ男女之事、所替之地まで送届、其上本国え可返之、

但、過廿箇年は可為譜代事

附、譜代に出し置男女之事、於無其紛は譜代勿論之事

右條々依 仰執達如件

寛永十年八月十八日

（阿部重次）  
対馬守

（阿部忠秋）  
豊後守

（松平信綱）  
伊豆守

上使中

この條々では、未進年貢は破棄されると規定されている（第四条）。つまり、領主と領民の關係が切れると年貢徴収権

が喪失することになった。この規定は以後の転封に際しても適用されたため、未進年貢については旧領主と旧領民は無関係になるという原則が江戸時代を通じてあったと言えよう。

しかし、二章で検討したように、未進年貢を「貸借」関係化するという柔軟な運用が実際には行われていた。未進年貢を「種借」だとして第二条を適用し、第三条の規定に従って証文を取ることで「貸借」関係化がはかられたのである。<sup>37)</sup>未進年貢の破棄は領主・領民間における負担と御救関係が断絶したことを意味し、旧領主と旧領民の相對關係とする運用がなされていたのである。

こうした「貸借」関係化について幕府はどのように考えていたのだろうか。享保一七年（一七三二）に河内国西代から伊勢国神戸へ転封になった本多忠統は、未進年貢の処理について勘定所へ問い合わせをしている。勘定所からは、残らず取り立てるべきだが取り立てできない場合には証文を取っておくようにとの指示があった。<sup>38)</sup>つまり、未進年貢の「貸借」関係化は、原則と実態を両立させるために、幕府が認めていた未進年貢の処理方法であった。

一方、武家奉公による未進年貢の返済については第五条に規定がある。未進年貢の代わりに武家奉公する男女を転封先

に連れて行くことが認められていた。未進年貢の納入後は本来の居住地へ戻す規定となっている。つまり転封時には、年季期間中である武家奉公人は年季が明けるまでは武家奉公人であることが優先され、未進年貢という奉公の理由や、本来は百姓身分であったことは考慮されていない。すなわち、未進年貢のため武家奉公している百姓は、主従関係という人と人との関係であり、領主・領民間の関係で把握されていない。そのため、転封による関係の変化は起こらなかったものである。

この規定は後に「未進方二取つかうふ男女之儀、可為主従相對次第」と変化した。<sup>39)</sup>武家奉公の年季中であっても相對で主従関係を切ることが可能な規定となっており、旧領主からみれば強制力が弱くなったと言える。これは、主従関係よりも「貸借」関係という側面が大きくなったことの表れである。間部氏の転封時には変化後の規定が適用されていた。役に立たない者が大部分であったり、欠落が起きている。負担と御救の関係から脱却し、労働力の提供による未進年貢の返済という「貸借」関係に移行したため、領民に対する領主の強制力が発揮できなくなったのである。

こうした状況の下で、「貸借」関係化した債権の回収を現実

にするために旧領主はどのような対応をとったのだろうか。  
次の史料は、間部氏の江戸家老が国元家老に出した指示であり、旧領主の対応を知ることができる。<sup>⑩</sup>

### 【史料13】

一、先達而も申遣候本多中務大輔様より三嶋郡之内八ヶ村江御貸附米返納残、三百拾貳石八斗七升取立候様二と、梶金平・河面藏人・佐野一郎右衛門より又々頼申来候手紙、并御貸付米之目録右八ヶ村之村付、鈴木清藏・茂呂武右衛門方江狛弥五右衛門へ書状共此度申遣候、此方御物成皆済不仕以前二取立候儀者、前々御料・御私領渡り之村々より茂追々二返納之趣目録二記被指越候、此通於無相違者一向打なくなりにも罷成間敷候間、清藏・武右衛門へ相応之返答御用人中茂内見致、後々差支二不罷成様可被致候、一年二年二皆済之積申付候而者百姓可致困窮候、三四年二茂皆済之積含二而返納候様二申付可然と存候、外様へ之御頼と違如在難被遊筋候間、近年御代官方へ御取立被成員数少々米高多返納申付可然存候、此意味相川手万右衛門江申含候間可被得其意候

大名転封時における領主と領民

宝永元年（一七〇四）に越後国村上から三河国刈屋に転封になった本多忠良が、旧領である三島郡内八カ村での貸し付け米の返納残高三二二石八斗七升の取り立てを、享保二年（一七一七）に間部氏に依頼している。現在の領主である間部氏が旧領主本多氏の貸し付け米の回収を代行することとなった。注目したいのは、本多忠良が外の大名と違い、受けざるを得ないと判断している点である（傍線部②）。依頼主によっては回収の代行をしない可能性があることを示しており、代行は新領主と旧領主の個人的な関係によって実施されたのである。また、江戸家老と用人で代行の実施について相談した際、百姓が困窮するなど後の差し支えにならない方法が模索されている（傍線部①）。回収の代行は、百姓成立が大前提であった。換言すれば、新領主の責務である百姓成立の中に組み込む形で回収の代行をしたのである。そのため、旧領主はその場合も新領主への依頼が必要であり、新領主が百姓成立が可能かどうかを判断して諾否を決定したのである。第二章第一節で江川太郎左衛門の「内意」として返済方法が提示されていたが、その場合も新領主である幕府代官が百姓成立が可能な方法を示したのである。

武家奉公人として「貸借」関係化した場合も第二章第二節



で検討したように、欠落した武家奉公人の給金は、旧領主が新領主に依頼し、新領主が認めた場合、新領主が取り立てを代行している。「貸借」関係化した貸し付けを回収するためには、(a)新領主・旧領主間の人的関係を前提とし、(b)旧領主から新領主への依頼があり、(c)百姓成立が可能な返済方法を新領主が模索する、とのプロセスを経る必要があった。史料12の「條々」で示された未進年貢の処理は、実際には新旧の領主による依頼関係によって運用され、実現していたのである。

## おわりに

以上三章に渡り、転封時における領主と領民の関係性の変化について、未進年貢の処理を素材にして検討した。転封によって領主が領民に対して持っていた様々な権限は断絶する。年貢徴収権もその一つである。旧領主は旧領民に対し未進年貢を徴収する権限がなくなるため、「貸借」関係化という相對關係への移行を行う。「貸借」関係のもとで債権の回収が不能になった場合、新領主が債権の回収を代行することで「貸借」関係の解消をはかったのである。

こうした手続きを領主と領民の関係から整理しておきたい。領主が転封する場合、領民が領主を引き留める訴願を行うことがある。その願書では、「何卒格別之以 御慈悲、尚永久清水領与被成置、是迄之通り無難二百姓永統御年貢御上納仕候様被成下置候へ者、莫太之御仁恵与一同難有」<sup>41</sup>、「今更御私領渡りと相成候ては、数百ヶ年来御料所之御政事二相馴染候村方、前々より之仕癖改兼、彼是混雜等取出し、畢竟ハ御收納ニ相拘り可申様成行候」<sup>42</sup>など、年貢の收納に関わる問題点を指摘するものが多くある。

これらの願書における「御年貢御上納」とは、負担と御救関係で成り立っている年貢収納である。転封があるとこの関係が断絶し、新たな「貸借」関係が生じる。さらに「貸借」関係が新領主の負担と御救関係に組み込まれる可能性があり、新たな負担増加の可能性もある。領主を引き留める領民が「御收納ニ拘り」という場合、具体的には新領主の百姓成立に組み込まれた旧領主の「貸借」関係がもたらす弊害を指していると考えられる。

また、領主と領民の関係を双務的な「契約」関係とみた場合、転封によって「契約」関係は断絶し、新たな「貸借」関係へと移行したと言えよう。ただ、前者は領主の支配権に裏

打ちされた関係であるのに対し、後者は「契約」者間の相對契約である点に大きな違いがある。この相對契約を新領主の「契約」關係に組み込むことにより、旧領主は債權の回收が可能となった。これが旧領主から新領主への依頼によって成り立っていたことは、広く領主層全体の共通利益だと考えられていたことを示していると言えよう。

- (1) 転封については藤野保氏が『幕藩体制史の研究』（新訂版、吉川弘文館、一九七五）で数量的把握を軸とした分析を行っており、領主と領民の關係への言及もある。また谷口昭氏は、多くの転封關係史料を収集し、転封について精力的に論考を発表している。本稿と関連する論考については該当箇所で触れたい。また、転封にともなう城の受け渡しについては白峰旬氏の研究がある（『幕府権力と城郭統制』岩田書院、二〇〇八）。
- (2) 青木虹二編『百姓一揆史料集成』（三一書房）には領主引き留め一揆の事例が多く収録されている。また、各地の自治体史においても領主引き留めの事例が多く紹介されている。なお改易が領民に与えた影響については、天明八年（一七八八）に改易された小堀正方（近江国小室・一万石）の債務処理問題からその影響を検討した藤田恒春氏の研究がある（『大名『改易』の構造』（『史泉』六五号、一九八七））。
- (3) 宮崎克則「藩主の転封と領民動揺をめぐる問題―肥前唐津藩その他を素材として―」（『日本歴史』四四七、一九八五、のち同『九州の一揆・打ちこわし』（海鳥社、二〇〇九）所収）。
- (4) 北島正元「『三方領知替』と上知令」（『徳川林政史研究所紀要』一九七三年版）。
- (5) 深谷克己「取り立てとお救い―年貢・諸役と夫食・種借―」（山口啓二他編『日本の社会史』第四卷・負担と贈与、

岩波書店、一九八六。のち同『百姓成立』塙書房、一九九三所収。

- (6) 朝尾直弘「公儀」と幕藩領主制」(歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』五、東京大学出版会、一九八五。のち同『將軍権力の創出』岩波書店、一九九四および『朝尾直弘著作集』第三卷、岩波書店、二〇〇四所収。

- (7) 藪田貫「地域史研究と差別―戦後歴史学の転換点に立つて―」(『部落史研究』五、解放出版社、二〇〇一)。のち同『近世大坂地域の史的的研究』清文堂出版、二〇〇五所収。なお同書所収の論文で藪田氏は、領主と農民の関係を片務的に捉える研究への批判を度々行っているが、筆者はその批判に全面的に賛成であり、双務的に捉えることが重要であると考えている点を明言しておきたい。

- (8) 『寛政重修諸家譜』第二二。以下『寛政重修諸家譜』による記述にはいちいち注記をしなかった。

- (9) 『国史大辞典』「間部詮房」の項目。

- (10) 城付の領知は群馬、片岡、碓氷三郡の二万石で、残り三万石は飛地領として伊豆国、和泉国、摂津国、下総国で領有した。

- (11) 越後国岩船郡(八一カ村)、蒲原郡(八三カ村)、三島郡(二四カ村)で五万石であった(『徳川吉宗判物写』(『鯖江市史』第四卷、一九八四)。

- (12) 「享浄院殿御実録」(『間部家文書』第一卷、一九八〇)。  
(13) 五万石は今立郡(二〇五カ村)、丹生郡(二四カ村)、大

野郡(一一カ村)の三郡の村々からなる(『徳川吉宗朱印状』(『鯖江市史』第四卷、一九八四)。

- (14) 「従江戸到来御用状」(『間部家文書』第一卷、一九八〇、同書第二卷、一九八二)。「従江戸到来御用状」は間部氏の江戸家老から国元家老へ宛てて出された御用状であり、基本的には江戸家老の意志が記されている。ただし、国元からの御用状を引用している場合があり、その場合は国元家老の意志が記されている。

以後、「御用状」と略記し、引用の際には「御用状」享保二年八月一四日。のように年月日を併記する。また引用した史料の読点を付け替えているが、いちいち注記はしていない。

- (15) 「御用状」享保六年九月一〇日、同享保六年十一月七日。

- (16) 「御用状」享保二年四月一七日。

- (17) 「御用状」享保元年閏二月一四日。

- (18) 「御用状」享保二年二月一日。

- (19) 「御用状」享保二年二月一七日。

- (20) 「御用状」享保元年閏二月一四日。

(21) 深谷氏は、領主は百姓が「相続」くようにするのが当然であり、それが怠られれば耕作地の上知をとまなう「御百姓身分」の返上も辞さないという考え方が百姓にあったことを指摘している(注(5) 深谷前掲書)。

- (22) 史料3にある「伺書」の作成過程について触れておきたい。閏二月一四日の「御用状」には国元家老が江戸家老に

宛てて以下のように記している。

(正徳五年)  
「去末年之御年貢御取立之儀御代官江茂度々稠敷被申渡候、御代官中茂随分精出取立候得共、困窮之者無抔滞候、依之御代官伺書御用人奥書被指出候を此度逐一覽候、伺書之通相違茂無之様子ニ候間、相談之趣可申遣

史料3にある「御用人中被存之」とある部分は傍線部にある「御用人奥書」に対応する。つまり、未進年貢の処理については、年貢収納を担当する代官が作成した「伺書」を用人が追認の上奥書をし、さらに国元家老が確認の上、江戸家老へ送られたことが判明する。代官の判断が最終的に江戸家老の決済に回されたのである。

(23) 「御用状」享保元年閏二月一四日。

(24) 享保元年三月十一日の「御用状」には「去末年ノ御年貢未進取立之儀ニ付、於其元吟味之趣被申越、紙面之通逸々承届候」と江戸家老が国元家老に報告している。再度提出した「伺書」の通り、江戸家老から藩主に報告がなされている。

(25) 「御用状」享保三年六月七日。

(26) 実際には新井が派遣され、九月に村上へ戻っている

(御用状) 享保三年九月一九日。

(27) 「御用状」享保六年一〇月二〇日。

(28) 「御用状」享保三年二月五日。

(29) 「御用状」享保三年二月一日。

(30) 未進年貢返済のため、旧領主が新しい領地で百姓の身柄を拘束することについての根拠は第三章で検討する。

(31) 「御用状」享保二年八月四日。

(32) 後に述べるように、松平氏からの届けは間部氏の江戸留守居を通じてなされており、松平氏の役人が直接三条の大庄屋へ届け出をしたのではない。

三条町は慶安二年(一六四九)以降村上藩領であり、村上藩の蒲原郡・三島郡の中心地であった。万治元年(一六五八)には大庄屋屋敷や代官屋敷が確認でき、元禄元年(一六八八)に村上藩三条陣屋が設置された(『新潟県の地名』平凡社、一九八六)。「御用状」では「三条御役所」と記されている。

(33) 「御用状」享保二年八月九日。

(34) 谷口昭「家中の履歴」越智松平家の初転封―(下)―(『名城法学』五四―三、二〇〇五)。注(一) 白峰前掲書。

(35) 石井良助校訂『武家厳制録』創元社、一九五九、一九四号文書。なお、この下知状は『武家厳制録』では「寛永十九年」とあるが、『概説古文書学』(近世編、吉川弘文館、一九八九)では「寛永十年」となっている(同書七五―七七頁)。「徳川実紀」の記事をもとにして訂正されたものと思われるが、本稿では『概説古文書学』の年次に従った。貞享三年(一六八六)四月の「條々」(『岩槻市史』近世

史料編Ⅲ藩政史料（上）、一九八一、谷口昭「転封考 史料編藤井松平家文書（二）」『名城法學』五四―四、二〇〇五）や、寛延二年（一七四九）五月の「條々」（群馬県史）資料編一〇、一九七八）など、多くの事例がある。

（37）史料1の(C)①では「未進之分ハ種貸等之積返納無相違様ニ証文入念取候様可被申付候」とあり、まさに未進年貢を「種貸」に読み替えたことを示している。

（38）『鈴鹿市史』第二卷、一九八三。

（39）変化の時期および理由については別の機会に論じたい。

（40）「御用状」享保二年八月九日。

（41）「吾妻郡清水領村々上知反对歎願書」（『群馬県史』資料編十一、一九八〇）。

（42）「只越村御領所永統願」（『穂積町史』史料編一、一九七五）。